

# 冠句

今井 三日月

柴田 遊児 選

西村 吟雪

特選 心地よく 一日を満たし恙なく

犬上郡豊郷町 北川 泰子

(評) 冠句の真髓である生活人情が詠まれていて秀句、それぞれの立場でひと日の業を成し終えて健やかに心身をほぐす、その果てに感謝の気持ちが出づばらしい、平和でなごやかな家庭が偲ばれる。

入選 心地よく 無言で通じる対湯呑み

後三条町 吉原 初美

(評) 命を結んで早やうん十年互いに心が解る。きょうもそっと差し出すタイミング、それは互いに絆を結び合う幸せいはの夫婦、ほのかに心暖まる刻にお天道様も微笑み見守る。

入選 寝つかれず 悲しい嘘が身を攻める

新海町 野田 美代

(評) 誰もが経験した様な話。自分の立場を少しでも有利にする為に軽い気持ちで吐いたひと言が大きな波紋となって周りの人を傷つける。一人になって考えると、あのひと言が自分のしかかる人間の哀しい性のひとコマ。

特選 寝つかれず 胸で遊ばす恋一つ

清崎町 柳本 和子

(評) 幾つに成っても老春の男と女、老い木に花夢で逢いたい語りたい、これが性かと惑いつつ、人生黄昏れ赤く灯す。

入選 独り立ち もう道草は許されず

新海町 野田 惣次郎

(評) 社会人として起点に立つ心懐の吐露だろうか。未知の世界に羽ばたいていく教訓だろうか。下五に若人の決意と行動に身も心も自分に対し責任の重さ大切さを暗示した感深い逸句。

特選 独り立ち 希望に満し弾む胸

彦富町 池田 光雄

(評) 厳しい時世の中に立ち向かいながら、決して臆することなく種々多彩な夢を胸に、身も心も張り切って旅立つ、若人の爽やかさ溢れる気持ちが出づばいい、清新な調べがゆるみなくかもし出されている。

入選 心地よく 五感くすぐる花に酔う

田附町 大谷 みつ子

(評) 春爛漫の桜の下であるうか、何であれ花を愛でていると本当に心が和む。少し位むしゃくしゃしていても自然と穏やかな気持ちになるから不思議。美しく穏やかな一句。

入選 独り立ち 我が權を得て出航す

犬上郡豊郷町 元持和子

佳作 心地よく 風が私を誘ってる

正法寺町 金子君子

(評) 学窓で学びし知識に自己を信じ社会に貢献の多彩な夢を携え、前途洋々その情景が生きいきと描き出されている佳吟といえましょう。今日の船出に大きな期待を寄せ拍手を送る。

佳作 独り立ち 躓く石を蹴る強さ

甲崎町 神崎ひさ

入選 寝つかれず 人知れず泣く仮の宿

甲賀市 大原ふさ子

佳作 寝つかれず 冠句に詩を乗せてゆく

本庄町 今堀伊太郎

(評) 心の揺れをゆき悩み想いわずらう胸の悼み、ぬぐい切れぬ寂しさ哀しさが熱く伝わってくる。深々と更ける夜の孤独感、良心を咎の虚ろいが流れる。句低の、冠題の核心を鋭くついた点が印象に残る。

佳作 独り立ち 子の手を離す春が来て

稲部町 辻昭子

佳作 心地よく 四季の風舞う城下町

西今町 松岡晴代

佳作 寝つかれず あの一言が身を責める

田附町 大谷貞三

佳作 心地よく 湯舟に浮かす今日の汗

新海町 野田市郎

佳作 独り立ち 術後の一步に拍手受け

大藪町 外村輝夫



佳作 寝つかれず 行きつ戻りつ木の葉舟

佳作 心地よく

四恩しおんを抱だきて湯ゆに浸ひたる

古沢町 真野 美栄子

蒲生郡竜王町 松瀬 竜子

佳作 心地よく 菰こもの風情を着る新芽

佳作 寝つかれず

諍こもいありて折れしども

田附町 上田 文子

犬上郡豊郷町 伊香 とし子

佳作 独り立ち なん関突破へ晴れた空

佳作 独り立ち

あんよは上手一歩二歩

犬上郡豊郷町 元持 きよ子

犬上郡多賀町 木村 正子

佳作 寝つかれず 悩みの出口無き迷路

佳作 心地よく

米寿の膳ほに栄やからゆ族

新海町 野田 ヒサ子

東近江市 片岡 弘

佳作 独り立ち 引く手振り切る春の独楽

佳作 寝つかれず

生ゆく途の煩惱ぼんに

長曾根南町 高 恵三郎

鳥居本町 滝口 寿美夫

佳作 心地よく 二人の歴史寄り添いて

佳作 独り立ち

希望に燃えた意志強く

東近江市 小林 清次郎

肥田町 青木 徳男

佳作 寝つかれず 思案の綾が邪魔をして

佳作 心地よく

湖岸こがんを走はしるツーリング

古沢町 野洲 令子

長浜市 野口 成人

佳作 独り立ち 背負う健気な忍の文字

佳作 独り立ち

祝う晴着に花吹雪

米原市 畑中 公雄

普光寺町 河合 淳子

佳作 寝つかれず 検診結果聞くまでは

犬上郡豊郷町 西山 伊千郎

佳作 心地よく 微笑み返すおもてなし

犬上郡豊郷町 北川 乙比古

佳作 独り立ち 若い血潮が農背負う

愛知郡愛荘町 青木 郁子

佳作 寝つかれず 自問自答をくり返す

鳥居本町 寺村 美恵

佳作 心地よく 母のふところ寝る赤児

犬上郡豊郷町 西山 肇



## 《総評》

本年は応募総数が残念ながら昨年よりも僅かに下回りましたが、市民文芸に寄せられました出句者の皆さんの意欲と熱意に敬意を表しますと共に大変うれしく深く感謝申し上げます。よくお問合せがございませう審査法につきましては、皆さんからご投吟下さいました全句を文化振興室の方で、冠題を含む句のみを順不同無記名にて作成され、その真新しい小冊子をもとに柴田・西村両先生と不肖私の三名で一句一句精読、討議吟味を重ね一机上にて合同審査させていただきました。経験豊富な老練技法から新鮮味溢れる素直な句まで優れたものが多く、選定に限りがある中、止むをえず選外とせねばならぬ実情に苦慮いたしました。最終結果として以上の三十八声に落ち着いた次第でございます。ただ選者も万全でなきことはご存知の通り、ご理解ご寛容くださいますよう申し添えさせていただきます。

今回投吟不投句者を含む、初心者の方もいらつしやると思ひますので申し上げます。冠句は、季語・季節等にこだわることなく自由吟ではあります、冠題から思いつく十二文字に心のなかの気持ちや、風景の楽しさ、また身のまわりで見つけた面白いことがらを一つの絵や映像が浮かんでくるよう、人の心にのこるよう言い表してほしいと思ひます。

最後に作句の心がまえとして、冠題の説明にならないよう併せ冠題に直ぐ接続する語を使わない。標語のような句にしない。広い発想で新しい感動をよむ。創作心は高く深くやさしく表現。等に気を

配りながらまとめあげ、作者自身でも楽しんでいただきたいと思ひます。

どうぞ句友の皆さん選外の方も紙ひとえ、めげることなく次回もござつてご投吟下さいますよう切にお願い申し上げます。拙いペンを置かしていただきます。

愚考短慮 今井 三日月

### 選者 吟

独り立ち 野望涯なき風雲児

柴田 遊児

心地よく 素直に苦言受け入れる

西村 吟雪

寝つかれず 親と言う名の苦労性

今井 三日月